

宇宙の力を感ずる

先号の「験を担ぐ」の続き。占いや予言にはいかがわしい気持ちがつきまとうが、人は人力の及ばない超能力にあこがれるし、幸運をもたらす「グッズ」にお金を払う。「迷信だ」と切って捨てる人より、大きい力を感じて頭を下げる人のほうが社会でも会社でも優れた人ではないか。

黄色い三角形が幸運をまねく

日本橋の繊維問屋街はシャッターを閉めたり商売替えをしたところが多く、栄えていた往時の面影はない。

その中で日社は女性ファッションの小売店を五店も出して気を吐いている。本社の商品の出し入れは頻繁で、社員はきびきびと立ち働いている。

本社のいたるところに奇妙な布製の漁旗が貼られている。漁船が掲げる旗であるが、まん中に黄色い太線の正三角形が描かれてい

る。この三角形以外はよく見る大漁旗と同じ図柄である。

日社がなぜ業績好調なのかを聞くと、日社長は「あれです」と大漁旗を指した。

数えれば何枚あるか分からない。壁という壁に貼られている。

「大漁を願う景気付けか」と言

うと、まじめな顔で「違う、幸運を呼び込む旗だ」と言う。

日社も他と同じように客が減り売り上げが落ち青くなっていた。

経営者の集いで知り合いの日社長に元気の秘訣を聞いた。社長は大漁旗を紹介した。「神頼みか」と日社長は苦笑したが、こんなこと

で会社がよくなるなら一枚一万円近い旗を三枚購入して会社の壁の高い所に貼り出した。

問屋に客は来ないのではなく、

客はいないのだ。客を呼ぶ営業戦

略は無駄だ。直接消費者に売る小売店しかない。日社長は決断し

小売店を出した。当たった！原宿、青山、六本木と、若い女性向

けのしゃれた店をつぎつぎにオープンし成功した。

大漁旗のおかげと旗の数を増やした。旗に囲まれて座っていると

カンがさえる気がする。「来年は黒が流行する、黒系のものを仕入

れよう」他店に先駆けて黒い衣類をならべる。小売業者も黒系を大

量に買っていく。小売店だけでなく卸しのほうも好調である。

「同業者にこの旗を勧めるんですが誰も本気にしない、こんな旗

が一万円もするのか、もったいな

いと言う」と日社長は笑った。

関西の中堅インテリア商品販売会社で同様の話を聞いた。

二代目社長は自分のしたいことができずに悩んでいた。会社のためにいい案だと思いが、先代の時からいるベテランの部長連中が反

なもの勧めた。総額三百万だとい

いう。設置というがこんな言葉を使うほどの物ではない。

丸いアクリル製の透明な板を天井からつり下げる、ただそれだけ

い。詐欺のようにも思えたが、紹介者が信用できる人なので三百万

円投資した。

アクリル板には黄色い太線の正三角形。大漁旗と同じである。

「二人の老害部長が、理由はそれぞれ違いますが、つぎつぎと辞めていきました。私は背筋がゾク

ゾクしました。会社の空気がいつから入ってくるらしい。

人は地球という小さい星に住む生き物だから、自転公転などの星

のルールと宇宙の力の影響から逃れられない。

太陽と月の引力によって海の満潮干潮がで、母親の胎内から赤ん

坊が生まれ出るのはこの「引力」が深く関係している。

東北大震災などの地震も引力によって引き起こされているという学説がある。

音楽、美術、小説などの天才の多くが、「宇宙の力によって創作した」と語っている。天才とは宇宙が「宇宙の力を使いたまえ」と

選んだ特別な人である。

仏教で「生かされている」と説教するの、人は自力で生きている

のではなく、もっと大きい力、宇宙の力に支配されていることを

知って、傲慢な心を戒めよということである。

蟻の生活を見る。脇目も振らず働いている。その巢にバケツの水を

一杯ぶちまける。こんな「天災」を蟻は予測していない。パニックで

ある。秩序だった社会（巢）は壊滅し多くが死ぬ。その光景を見て、

人もこの蟻と同じだと思ふ。

宇宙には信じられない強大な力がある。人が造った核爆弾や建造

物の比ではない。命を作り出す力、地球を一瞬のうちに消し去る力が

ある。

人はこの力の存在を信じている。黄色い三角形の大漁旗やアクリル円板は、評判のよくない新興宗教団体が販売している商品である。当初はこれが主力商品だったが、つぎつぎと関連アイデア商

経営管理講座 289 染谷和巳

品を開発し、会員制を敷いて信者を増やしするうちに、オウム真理教と同じようにマインドコントロールによって組織強化をはかるい

かがわしい宗教団体に墮落した。だが事例で紹介したように黄色

い三角形は人に幸運をもたらす。買わなくても自分できれいに描い

て飾ればいいのである。

家の屋根はフラットではなく、宇宙パワーが入りやすい鋭角の屋根がよい。外を歩く時の帽子は平

らなものではなく、トンガリ帽子がいい。

この物理的影響を信じない人でも、社会的な影響は信じる人が

多い。大安、仏滅、厄年などの暦、中国の「易经」を源流とする易や

占いである。

長い年月をかけて人が経験してきたことを統計分析し確率を出したのが「易经」であり、根拠のないアズツポウではない。易者が身を清め心をやすらかにして宇宙

パワーを導入し、笹竹（ぜいちく）その他の物を使って卦（け）を出す。簡単なことは陰陽二種を組み

合わせた八卦で見、複雑なことは六十四卦で見る。出た卦を易经の「答」に照らして伝える。

易者の優劣は、宇宙力呼び込む能力があるかどうかで決まる。易学をいくら勉強してもこの力のない人の占いは当たらない。よく当たると人気のある人は芸術の天才同様、宇宙の力を借りて卦を出している。これを靈感や超能力という場合もある。

厄除けしなくても自覚が大事

厄強の筋肉マン、病気をしたことがない男が、自動車事故に合ったわけでもないのにムチウチ症になり首にコルセットをはめた。

それが治って少したって今度は腕をサポーターで吊っている。腕が痛くて上がらないので病院に行くと「心臓が悪い」と言われた。

そのため腕が動かないという。カテーテル手術で一週間入院した。その後腕は上がらない。左腕ではあるが不便このうえない。

だが体に自信のある男は弱音を吐かない。つぎに妻が肺炎で入院した。これには参った。

知人が「厄年だから厄払いに行つてきてはどうか」と勧めた。男は厄年だけでなく神仏のご利益も易者の占いも全く信じなかった。

こういう話になると鼻で笑って取り合わなかった。

しかし今回は参った。数え年六十一歳の厄年である。有名な厄除け神社に詣で、お祓いしてもらった。

妻が全快して退院し、腕が動くようになりサポーターがとれた。この自覚が大事である。

男は知人に「厄年って本当にあるんですね」とくやしそうに言った。

厄年とは人間の体が大きく変わる節目の年をいう。体力や気力が落ちて今までの活動ができなくなっているのに、それを自覚しないで生活する。すると病気になる。そうならないようこの節目の年に厄除け、厄払いをしたほうがいいという習わしである。

「習わし」と言ったが、日本では千年以上前から行われており、今も「厄除け」は神社仏閣の主力商品である。厄年の日本人は男女問わず厄除けに詣でる。

数え年で男は二十五、四十二、六十一、女は十九、三十三、三十七と三回ずつ厄年があるが、これは平安時代の決め事で、長寿の現代には合わない。

男は七十代に、女は六十代に体が大きく変わる節目の年がある。ここに新しい厄年を設け、若い厄年は廃止したほうがいい。

「今年が厄年だ、用心しよう」この自覚が大事である。